

有島武郎「首途」論(三)

—「某年八月三十一日。朝、晴曇不定。夜、雨。」から「某年九月五日。」まで—

尾西 康充

一、「某年八月三十一日。朝、晴曇不定。夜、雨。」この日もまた「A」にとつて自由論と予定論との対立、すなわち「意志の絶対自由」「無限の自己責任」と「宿命の鉄鎖」との対立は苦悩の原因となつていた。これはスコット博士の「悵鬱」に影響されて生じたもので、有島の日記（一九〇四年八月一七日）には、スコット博士とつぎのように「精神上ノ問題」を議論したことが記されている。

午后ハスコット氏ノ看護ヲナス。夕刻精神上ノ問題ヲ論ス。彼ハ其心ノ中ニ種々ナル葛藤ヲ有ス。サレドモソハ一ノ連絡ヲ有セズ。サレバ一問題解釈セラルレバ、解釈セラレタル他問題ハ再ビ解釈ス可キ問題トナリテ彼ノ心中ニ販リ来ルナリ。彼ハカクナリシ原因ヲ今夕明サマニ余ニ告ゲヌ。曰ク「余ニ一人ノ弟アリ。南方ニ農場ヲ有シ道程遠キガ故ニ互ニ相思ヒナガラ遇ハザルコト既ニ二十三年ニ及ビ

又。此間彼ハ親切ニモ余ガ窮乏ヲ救ハンガ為メニ金ヲ送り越セシコトアリ。然ル約三ヶ月前彼ノ一友余ニ書ヲ致シテ、彼ノ事業失敗シ彼ハ困難ト戦ヒツ、アリト報シ来リヌ。余ハ此時適當ノ所置ヲ彼ノ為メニナスベカリシナリ。サレドモ彼自身ノ書ニハ左程マデニ事逼レル様子ハ報ゼラレザリシガ故ニ余ハ其儘ニ打捨テ置キヌ。而シテ一日突然彼ガ自殺ノ悲報ニ接セシ時ノ余ガ驚愕ト苦痛トヲ察シ給へ。カクテ后、神余ヲ罰シ給ヘルナラン、余ハ余ニ来ル患者ニ、極メテ安全ナル薬剤ヲ調スルニモ極メテ平易ナル手術ヲ施スニモ、一方ナラヌ恐怖ヲ覚ユルニ至リヌ。一日余ハ妻ノ留ムルヲモ聞キ入レズシテ教会ニ至リヌ。而シテ其販途余ガ心中ニ何人ニモ言明シ難キ恐ル可キ思想来リヌ。余ハ此思想ノ頭ヲ犯シ来ルナリ。余ハ是レヲ如何ニスベキゾヤ」ト。余ハ奇異ナル沈黙ヲ以テ謹ミ聞キヌ。夜モ亦彼ト共ニ庭ニ出ツ。月漸ク絃ナラントス。不可思議ナル人生ノ迷路ヲ解

スルノ如何ニ難キカヲ益思フ。

ここには博士が狂気に陥る原因の一つとなつた弟の自殺の経緯が明かされている。博士によれば、親切な弟は自分が窮乏生活におかれていたとき送金してくれたにもかかわらず、弟の友人から事業の失敗を報じられても自分は樂觀視し弟を支援しようとはしなかつた。その後弟は自殺してしまい、自分には「神」の「罰」が下されるようになったという。博士は過去のできごとを思い返し何度も解釈し直して記憶を再構成しようと努めるのだが全く成功せず、予定説に従つて、神は「世の最初から最終に亘つて据ゑられた運命の道を塵ほども枉げようとはし給はぬのだ」と考え、「カインと一緒に永遠に咀はれた靈魂」を持つ自分は滅びに向かう運命にあると決定されていることに絶望してしまふ。「A」には博士の人生から「不可思議ナル人生ノ迷路ヲ解スルノ如何ニ難キカ」を思わせられるようになったのである。

「A」は午後になると久しぶりに「P市」に出かけ、「H大学」に入学する準備をするための買い物をした。帰り際に「商業會議所の図書館」に入ろうとすると、その入口で「一人の乞食」に遭う。昨年のクリスマス休暇の折、歴史を研究するために読書をしている「A」に向かつて、彼は「お前の国のやうな新興國に歴史の研究が何んの利益になる。歴史といふものは老大国の国民が祖先の自慢をする程著碌した時に研究すればいゝもの

だ。総じて学府的研究に実人生の助けとなるものは一つもない」といつて、「A」の読書を妨げた男であつた。兄とともに絨毯の製造をしていた彼は工場を見学させてやるからその調査でもしてみればどうかと勧めたのであつたが、「A」は彼を「蟲途の走る程嫌ひ」に感じて翌日から図書館には行かなくなつた。それからわずか八カ月の間に、彼は「全く別人のやうな容貌」に変わつており、「A」はこの醜い男に対して本能的な憎悪を感じながら、飛び退くやうに一町程離れた」という。

恐るべき実有の世だ。彼れはあのやうにして彼れの道の末遠く旅するのだらう。彼れの地に踏みつける歩みは段々鈍つて覚束ない間に、肉の眼に見えぬ彼れの歩みは疾風のやうに疾く鋭く、最後の顛倒を目がけて、時限と方処とを走り去る事だらう。実有の世……何といふ恐るべき実有の世だ。

「乞食」の實際の歩みと「肉の眼に見えぬ彼れの歩み」とを区別し、不可視に存在する違いから翻つて「実有の世」の恐ろしさに畏怖するといふ「A」の体験は、有島の日記（一九〇四年八月二九日）に記されたものとほぼ同じ、有島が実際に体験したできごとであつた。現実の厳しさに直面した「A」は「心外の世界に投げ与へてゐたお前の断片を少しづつなりとも引きもどして自己を築き上げる。今はその外に道はない」と感じる。

そして自己の主体の形成について思考を深めてゆく。

「心の貧しき者は幸なり」と云つた基督の言葉に許かれてゐてはならない。いゝ氣になつてその言葉を自分の都合のいゝやうに解釈してゐてはならない。心の貧しさを信仰となるまでに体得するのは一通りの発心で出来る事ではない。それは少しでも自分に阿り諛ふ弱者のなし得る所ではない。それはある意味に於て、自己主義者より更らに勇敢な飛躍を必要とする努力と経験との結果だ。

「A」にとつても有島にとつても、わずか八カ月の間にすっかり変わり果てた「乞食」に出会つたことは、浮き沈みの激しいアメリカ社会の一面を知らされることにもなつたが、生活の貧しさ以上に内面の貧しさは、キリスト教信仰では「天国」に迎えられるための大切なことがらとされる『マタイによる福音書』第五章第三節。権力や富を欲望しない、心のなかに何の持ち物もない、何に対しても自分を同一化しない人間こそ神の栄光を享けることができる。人を幸福にするものは、自分の力で手に入れられるこの世の富ではなく、祈りによって神から与えられる恵みだけであるというキリスト教信仰の核心に触れ、「心の貧しさを信仰となるまでに体得する」ことが決して生易しいものではないのを感じる。というのもこの教えによれば、なぜなら自己を形成するには、神以外のどんな概念にもアイデンテ

イテイの拠りどころを求めてはならず、神に向かつて自己をつねに解体しておかなければならないというジレンマを孕んでいるために、専ら他を否定し自己を肯定する「自己主義者」よりも「更らに勇敢な飛躍を必要とする努力と経験」が必要になるからである。有島は一九〇四年九月一日の日記のなかに、フレンド精神病院を辞めた同年九月一日にアヴォンデルを訪れ、クロウエル家の人びとに暖かく迎えてもらった思い出を、つぎのように記している。

人ノ心ノアタ、カサハ凡テノアタ、カサノ冠ナリ。余ノアタ、カキヲ望マンモノハ富ニ往ケ。懽呼ノアタ、カキヲ望マンモノハ名ニ往ケ。懽楽ノアタ、カキヲ望マンモノハ王ノ宮ニ往ケ。余ハ人ノ心ノアタ、カサヲ望ム。サレバ余ハヒソヤカニ余ノ貧シク弱キ心ニ往カナン。嗚呼道フ『心ノ貧シキモノハ幸ナリ』ト。余豈悔ヒンヤ。余豈ツブヤクベケンヤ。余ハ弱シ。サレドモ世ノ何物ヨリモ弱カラザルナリ

右の日記でも有島は心の弱いもの、貧しいものこそが神の救いを受け入れることができるというキリスト教に共鳴しているが、厳しく人生に立ち向かおうとする決意が「首途」の表現の方に強く示されている。

二、「某年九月二日。雨。」

「A」はこの日を「病院で過ごすべき最終の日」としているが、有島は実際には九月一六日まで勤務している。勤務期間はいずれも二カ月で、フィラデルフィアのハヴァアフォード大学を卒業しボストンのハーバード大学大学院に入学するまでの時期であった。「A」によれば、フレンド精神病院で働いた生活経験のなかには「一つの不思議な世界が建立」され、「生活の埃捨て場」ができたという。病院に集まった「二百人足らずの男女」は自分の「人生の足許に暗い影となつて何時までも離れずにあるだろう」、そして彼ら一人ひとりの過去を思つてみると「人の生活は暗いものと思はれる」のだが、「僕はまた失望はしない」、なぜなら「僕は若い。力がある。その力と若さまで僕は歩いて行かう。蹉いたら力のある限り又起き上るまでだ」と決めたからであつた。

今朝、「A」は目覚める前に「何とも云へない美しい夢」を見た。「羅馬の昔にあつたやうな大浴場」にいる夢で、「薄緑の綿で作つたトガのやうな浴衣」を着せてもらつて歩いてゆくと、浴池に続く「電光形の階段」には「雪白の衣服を着た二人の少女」が座つていた。リリーではないかと見間違えた片方の女性には「振仰いで天から降る光」を見ている「イポリータ」、あとの一人は「俯向きになつて頬杖」をついている「ビヤトリス」であつた。「イポリータ」が泉から右手で取り上げて「A」に渡したのは白い百合の花であつたが、「あなたはそれを召し上らなけ

ればいけません」という「イポリータ」の声に驚かされてよく見ると、右手にあるのは「生々しい真赤な小さな心臓」だつた。さらに「それはあの盲ひたビヤトリスの可哀い心臓で御座います。深紅の衣を着けた『愛』が持つて参りました」という儼かな声が聞こえると、「A」は夢のなかで「僕はダンテのキタ、ノバを思ひ出してゐるのだ」と思う。一二九三年に発表されたダンテの『新生』(La Vita Nuova)は、清新体派詩人ダンテが若い時代に書いた三一篇の詩とそれらの詩を書くに至つた経緯や作品の解題をまとめた詩文集である。『新生』の第三章には、擬人化されて表現された「愛」の幻影が「私」(ダンテ)の心臓を、紅色の布に軽く包まれて眠っている「淑女」(ダンテの恋人ベアトリーチェ、すなわち「ビヤトリス」)に食べさせるといふソネットがある。

『愛』は片手に私の心臓をもつて
両腕で薄衣を着て眠る淑女を抱き
いとも上機嫌に見えていたが、
やがて彼女をゆり起こすと彼女は
燃える心臓をおそろおそろる食べたが
やがて『愛』は泣きつつ立ち去るのが見えた(一)。

右のソネットからも分かるように、「A」の夢には原詩との異同があつて、心臓は「ビヤトリス」ではなくダンテのもの、深

紅の衣は「愛」ではなく「ベアトリーチエ」が着けているのであった。『新生』には「イポリータ」という名前の女性は登場せず、清新体詩人の第一人者でダンテの友人グイド・カヴァルカンティ (Guido Cavalcanti) の女性友達で、しばしばベアトリーチエとともに現れる「プリマヴェーラ」が登場する。彼女が「プリマヴェーラ」と呼ばれるのは、春のように麗しいからと同時に、プリマ（前に）ヴェーラ（来る）というベアトリーチエの出現を予告する婦人という象徴的な意味合いがある（②）。しかしここで重要なのは、眼の前の光景が『新生』のソネットに似ていることだけではなく、「A」が「リリー」に対して抱いてゐた不純らしい心」の存在に気づかされ「鞭たれるやうに」思ったことである。

そんな事を思ひながら僕はリリーに対して抱いてゐた不純らしい心を鞭たれるやうに思つた。心から湧き出るやうな懺悔の涙がじり／＼滲み出て来た。僕の夢は覚めた。然し全く覚め切つたとは思へないで、暫くはそのまゝで不思議に清く淋しい夢幻の間を彷徨つてゐた。秋雨の降る音ばかりが唯しと／＼と窓の外に聞こえてゐた。そのまゝで夜が悒鬱に白んだのだ。

「A」は自分が密かに抱いていた少女に対する倒錯した性愛に気づかされて「心から湧き出るやうな懺悔の涙」を滲ませ、

夢がようやく覚める。目覚めた後の朦朧とした意識のなかに浮かんだ「清く淋しい夢幻」という心象風景は、若い青年の傷つきやすい感受性を印象的に表現している。この夢のためにこの日一日「A」は「不思議に清められた意識の中」に生活することになった。

その後「A」は午後の休憩時間に、ラドラム博士に暇乞いをしてから、ホール氏のところに行き、ホール氏の妻とリリーにも別れを告げた。そこでは「普通土宗に通有な単純と、素朴と、清潔とが部屋の間々まで行き互つてゐた」という質素で清らかな生活を重んじるクエーカー教徒のライフスタイルをすぐに感じとっている。「在院の間読み返しく／＼て手垢のついたダンテの聖劇」を記念として贈らうとするが、堅い信仰を持つホール氏は、自分の学生時代はシェークスピアを読むのが飲酒に次ぐ「悪徳」であつたとして辞退する。しかしリリーなら時代も違い構わないだろうといい、彼女が「快く手を伸べてくれた」ので、「A」は彼女の手のうえに「赤皮の表紙の小さい冊子」を載せた。「首途」には、その冊子の脚注の一つとして掲載されていた「ギド、カバルカンチ」の詩が引用されている。

「けだかく、やさしく彼女過ぎ行けば、
驕慢は黙し、病は癒え、

信仰より害はれたるものは信仰に還り、
穢さるゝものとは一つだにある事なからん。

我れ更に彼女の高き徳を語らん、
彼女を見て悪心を抱き得るものは絶えてなしと」

他方、有島の日記（一九〇四年八月二日）には、実際に彼が
読んだと思われる右の詩の英語訳が記されている。

"She passeth on so gracious and so mild,

One's pride is quenched, and one of sick is well;

And they believe, who from the faith did err;

And none may near her come by harm defiled.

A mightier virtue have I yet to tell:

No man may think of evil, seeing her."

ダンテの英語訳『神曲』のなかで、右の詩が脚注に掲載されて
いるのは、ヘンリー・フランシス・ケアリー師 (Rev. Henry
Francis Cary) が英語訳し、M. グスタフ・ドール (M. Gustave
Dore) によつて装丁されたニューヨークの P. F. コリアー社
版 (P. F. Collier) 『神曲』である。出版年が一九〇〇年代とし
か分からないのは原本の刊記に不備があるためで、それは同じ
訳者がフィラデルフィアで一八二二年に刊行していた『神曲』
を底本にして、本文に批評を含んだ注釈とダンテの伝記および
年譜とが付された改訂版であった。P. F. コリアー社版の六
四ページの『神曲』煉獄編第一一曲の九〇から九九行にかけて

「一人のガイドが他のガイドから言語の光栄を奪いました」と
ある部分の脚注に右の詩が紹介されている(3)。すでに江頭太
助氏が指摘しているように、実際の詩の作者はガイド・カヴァ
ルカントイ (Guido Cavalcanti) ではなくガイド・グイニツェル
リ (Guido Guinicelli) だ、英訳書には一七一五年にジュスト・デ
コンティ (Giusto de Conti) が創作した『美しい手』 ("Bella
Mano") のなかに印刷された一節として説明されている(4)。
有島は一九〇四年九月一日の日記にも同じように引用してい
る。「けだかく、やさしく」過ぎゆく「彼女」とは、デコンティ
とつてはイザベラという女性であったとされ、有島にとつては
リリーであったと思われる(5)。有島の日記(九月一日)に
は、リリーとの別れの場面はつきのように記されている。

夜七時半 Mr. Hall 氏ヲ訪フ。今日迄デニ彼ノ家族ガ余ニ
与ヘシ大ナル慰藉ヲ謝セントテナリ。他ニアル可カリシ
Mrs. Hall モ Lily モ余ヲ見シガ為メニ販リ来リヌ。九時少
シ前マデ種々ノコト語ル。余ハ彼等ノ深情ニ酬ヒシガ為メ
ニ Dante ノ Divine Comedy ヲ送リヌ。別ル、時ハ互ニ
温キ笑ヲ以テ。サレドモ余ハ自ラ冷シ果テタル心ヲモテ。
「事終レリ」ト十字架ニツケラレタル余ガ情ハ叫ビテ眼
ヲ閉ヂヌ。

此夜例ノ如ク夜直ヲナス。

「事終レリ」という悲痛な叫びとともに「十字架ニツケラレタル余」という自己意識は、リリーとの別れを宿命的なものと考えた有島の諦念を示している。ホール氏の家族に別れを告げた「A」は夜勤の当直をするが、深夜二時ごろに「長い白の寝衣を引きずつた」スコット博士が「素足のまゝでしよんぼりと立つてゐる」のを目撃する。

博士は僕が忠実に看護に當つた事を賞めて、僕が永久に彼れから離れ去る事を悲しんでくれた。而して最後に「A、お前はいつか基督信徒だと云つた。私は信徒たるお前に一言だけ云ひ残しておく事がある。お前の生涯に、意識して些かの悪でも犯してはならない。若し犯したならばお前の平和は永遠に帰つて来ないだらう。償ひは出来ない。それを忘れてはいけない」。博士はさう云ひ終わると幽霊のやうに静かに僕の側を立ち離れて病室に這入つて行つた。

僕は今これだけの事実を書くに止めて置く。今僕の総身は、深更の寂莫の中で、恐怖とも、感激とも、発作とも解らない身ぶるひに震へてゐる。

予定論に忠実な博士が語つたように、キリスト教徒は「些かの悪でも犯してはならない」のなら、すでに罪を犯してしまつた「A」には、もはや「償ひは出来」ないことになる。そのことに気づいた「A」は「総身」が「身ぶるひ」に震えるのを

抑えられない。実際に有島は同じように博士の戒めによって暗然とさせられる体験をしており、一九〇四年九月二十六日の日記に記録されている。後述するように、この日有島はボストンに移動する汽車のなかで、昨夜出発前にフィラデルフィアで購入した「Evening Bulletin」を読んでみると、偶然にも博士がフレンド精神病院で縊死したことを報じる記事を目にした。日記には、博士と別れたときの場面がつぎのように記されている。

余ガ彼ノ院ヲ去ラントスル時ナリキ。彼ハ堅ク余ノ手ヲ握リ涙ニ滴テル声モテ余ニ謂テ曰ク、

「御身ハ実ニ我ニ優シカリキ。御身ノ余ヲ慰藉セントシテ尽力セルハ我ヨク之レヲ知ル。而シテ余ノ克ク此慰藉ニ酬ヒテ余ノ煩悶ヲ翻ス能ハザルハ余ノ力ノ及ブ所ニアラザレバナリ。神既ニ業ニ余ヲ永遠ノ刑罰ニ命シ給ヒヌ。如何ナル力モ亦ヨク余ヲ再ビ昔ノ余ヲシムル能ハズ。一度基督信徒トナリシモノ、罪ヲ犯スニ増シテ世ニ恐ル可キモノアルコトナシ。余ハ御身ノ基督信徒ナルヲ知ルガ故ニ特ニ云フ。忘レテモ罪ヲ犯スナカレ。人ニハ親切ナレ。人ニ教ユルノ機会アラバ互ニ相愛ス可キヲ教ヘヨ。余ガ離別ニ臨ミ御身ニ遺スノ語只是レノミ」

ト暗然トシテ其室ニ入り去リヌ。

「一度基督教徒になつた者は、罪を犯すこと以上に、世の中

で恐ろしいことはない」という博士の言葉は、有島の心を強く
とらえ、「余ハ此一大事件ヲ忘レジ。余ハコロ重ネテ思ヒメグラ
ス可シ」と心に誓わせたのであった。

三、「某年九月五日。」

この日は「首途」の最後の章に当たる。フィラデルフィアを
汽車で発ち、車窓から眺望できる夜明けの自然の美しさに心か
ら感動している。しかし「凡てが調和の極に達するやうな瞬間」
は「五分」とは続かず、西北の方角から湧き出た雨雲に「完全
の極に達した調和は他愛なく破れて、自然は眼の前で平凡な自
然に帰」つてしまふ。「ロ市で買つて置いた夕刊新聞」を拾い読
みしてゆくと、「医師の縊死」という言葉が続いて「ドクトル、
チエー、ビー、スコット」という文字が目飛び込んできた。
その記事の内容はつぎのようなものであったという。

“That well-known Dr. J. B. Scott, 48 years old, of
Gettysburg, committed suicide, by hanging himself with
a handkerchief in the F's asylum, at F.

He was received at the institution something ago, to be
treated for melancholia, as his health had been seriously
injured by the over-conscientious attention towards his
patients. During the absence of his nurse he ended his
life.” etc. etc.

右の英文を簡単に邦訳すると、著名なゲティスバーグの J・
B・スコット博士四八歳は F（フランクフォード）にある F（フ
レンド）精神病院でハンカチーフを使って縊死をした。博士は
かつて鬱病の治療を受けるために時々施設に収容されていた。
自己の忍耐に向けられた過度に良心的な注意のために博士の健
康が傷つけられていたからである。自分の看護師が不在の間に
自分の生命を終わらせたという。「首途」に使われたものと同ほ
同じ内容の新聞記事が一九〇四年九月二六日の日記にも筆写さ
れている。「首途」では、「A」はこの記事を読むと「深い真実
が真暗に眼の前に立塞がる」のを覚え、「よく僕の衣囊からは火
が燃え上がらなかつたものだ。よく僕の指先きは新聞に触れた
時に焼け爛れなかつたものだ」という戦きを感じた。そして「僕
の首途は血祭で咄はれた。或は血祭で祝福された。どちらであ
れ僕は活を入れられたやうな心持ち」をさせられたのである。

瘋癲病院の二ヶ月は殉情的な夢の二ヶ月だった。僕は是
れからは今までのやうにセンチメンタルであつてはならぬ。
自己を安価に弁護してはならぬ。蹉跌を恐れてはならぬ。
善悪醜美——僕のあらゆる力を集めて如実に生活して行か
う。僕はもつと自由に、もつと厳肅にならねばならぬ。僕
はその生活に堪へ得られるだらうか。

……然し今の場合になつて躊躇は無益だ。

成就か死か……唯静かに、静かに、静かに。(後略)

この小説の結末部分を読めば、キリスト教を棄教するというメッセージは直接的には伝わってこない。しかし博士によって「些かの悪でも犯してはならない」として示された予定論の厳しさに恐れを抱き、「もつと自由に、もつと厳肅に」と自己の理想を達成させようとする生活を目指しながらも「そんな生活に堪へ得られるだらうか」との「躊躇」を感じている。江頭太助氏は有島のこのときの心境を「看護夫生活の厳しい環境のさ中でありながら、有島はそれに耐え自己鞭撻と受け止めることによってより完成された自我像を求めつづけるために自我の内面に沈潜しやすくなり、『現在』における愛の完成など、信仰の實踐化がいかに至難の業であるかを思い知らされたであろう」と指摘している(6)。作品最後の「成就か死か……唯静かに、静かに、静かに」という言葉には、究極を目指して生きようという「A」の強い姿勢が示されていると同時に、教会や聖書の權威を否定して神との直接的な交感を重んじるクエーカー教徒の「沈黙の礼拝」と同じように、「A」もまた「静寂」のうちに自己の前途を神に祈っていると読める。「道徳的治療」(moral treatment)を重んじたフレンド精神病院は、精神医学史では「静かな避難場所」(A QUIET HAVEN)として表現されていた(7)。「A」は「静かな避難場所」を出てゆく「首途」に際して神に

祈りを捧げているのであり、この時点において棄教が決意されていたとはいえない

『リビングストーン伝』第四版序言(「東方時論」、一九一九年二〜四月)には、有島が棄教に至った経緯が語られ、フレンド精神病院で働いていたときに体験した否定的なできごととして、つぎの四点が挙げられている。

- 一、私は宇宙の本体なる人格的の神と直接の交感をした事の絶無なのを知った。
- 二、基督教の罪といふ觀念及び之れに付随する贖罪論が全然私の考へと相容れない事を知った。
- 三、未来観に対して疑問を抱き出した。
- 四、日露戦争によつて基督教国民の裏面を見せられた。

「一」の「直接の交感」をしたことがないという表現は、自己の信仰体験を、神と直接交感するクエーカー教徒の信仰と比較して否定し、「二」の「贖罪論」は博士の予定論の考え方に影響された結果、どうしてもそれを受け入れることができなかつたとする。主体の形成に深刻に苦しんでいた有島は「フレンド精神病院に勤務していた期間」に自己の信仰について根本的な省察をおこない続けていたが、「首途」では、はっきりと棄教が決意されているわけではなく、『リビングストーン伝』第四版序言が執筆された時点とは、信仰に関する考え方の差があるといえ

よう。『首途』から『リビングストーン伝』第四版序言が執筆されるまでの期間、すなわち有島自身も『リビングストーン伝』第四版序言のなかで「この二つの事変は私には大転換期だった」と語ったように一九一九年八月二日に妻安子、一二月四日に父武が相次いで死去したことによる動揺から棄教が決意されたのであって、その際に棄教に至る原因の発端を過去に遡って「フレンド精神病院に勤務していた期間」に見出そうとしたのである。

ではフレンド精神病院に勤務していた頃の信仰を知る手がかりとして、有島が一九〇四年九月一三日の日記に、ホール氏から借りた書籍『ステイブーン・グルレの生涯と福音の働きの想い出』(『Memory of the Life and Gospel Labors of Stephen Grellet, Friends book store, 304 Arch St.』)を長文にわたって引用したうえで、「是等ハ凡テ余ノ心深ク味ヘル所ナリ」と付言していることに着目したい。同書は有島がフレンド精神病院を辞職した九月一六日の前日の午後、「急読」されてからホール氏に返却されている。ステイブーン・グルレ(一七七三〜一八五五年)とは急進的なフランス人クエーカー教徒で、リヨン軍事大学を卒業後、ルイ一六世の身辺警護をしていた。フランス革命に際して死刑宣告を受けるがアメリカに脱出してウイリアム・ペンやジョージ・フォックスの著作を読んでクエーカーに共鳴し、北米やヨーロッパをまわって病院や監獄の改良、教育政策の拡充を訴えた。最後はニュージャージーで死去して埋葬

された。『ステイブーン・グルレの生涯と福音の働きの想い出』はベンジャミン・シーボーム(Benjamin Seebohm)によって執筆され、一八六〇年にフィラデルフィアのH・ロングストレス社(H. Longstrech)から刊行された。その後、一八七〇年にクリスチーナとロバート・アルソップ(Christine and Robert. Alsop)が縮約した第三版がロンドンのリチャード・バレットアンドサンズ社(Richard. Barrett and sons)から刊行された。有島がホール氏から借りて読んだのは、フィラデルフィアのアーチ通り三〇四番地のフレンド書店で購入したものであった。

同書を読んだ有島が日記に引用しているのは、フランス革命を逃れたグルレが一七九五年一二月にフィラデルフィアのクエーカー信徒たちに迎え入れられ、真の信仰に目覚めかけた場面である。ここにそれらの引用を紹介してみよう。

‘My mind was, at seasons, so taken up with a sense of the Lord’s love, that it seemed as if I could have continued days and nights swallowed up in it. But though the love of God thus filled my heart, yet most of the time it was clothed with deep exercises. Every step of my past life was retracted again and again. I suffered deeply not only for the evil I had done, but also for the good I had omitted to do,——not only for the great loss I had sustained myself, but also for the harm I saw that

my example might have done to others" (8)

「まるで昼夜の別なくそのなかで消えてしまったかのようにあつたほど、私の心は主の愛にとても満たされていた。しかしこのように神の愛が私の心に満たされていたにもかかわらず、それまでほとんどは深い悩みに被われていた。私の過去の人生のあらゆる歩みが何度も取り消された。私は自分がなした罪だけではなく怠けておこなわなかつた善のためにも——私が受けた大きな損失だけではなく、私が見た自分の手本が他人に与えたかもしれない害のためにも深く苦しんだ。」

グルレによれば、自分は今、真の信仰の入り口に立つて、これまでの人生のあらゆる場面が想起され、悪行はいうまでもなくたとえ善行であつても反省の種になつてゐるといふ。右のグルレの告白は、つねに内省を繰り返していた有島の当時の心情にきわめて近いものであつたといえよう。

"He show me how He is mouth, wisdom, and utterance to his true and faithful ministers: that it is from Him alone that they are to receive the subject they are to communicate to the people, and also to the when and the how. It is He who giveth the seeing eye, the hearing ear,

the understanding heart, and enableth the dumb to speak," (9)

「神は私に対して、神がどのようにして、真実で誠実な僕たちに対する口、智慧、発言であるのかを示した。すなわち人々に伝える主題、さらにまた時代と方法とを僕たちが受け取れるのは神からだだけだ。視る目、聴く耳、理解する心を与え、聾啞者を話せるようにするのは神である。」

"My desire for them is that they may come to the state of the child, —— the weaned child, —— that they may come to Christ, and learn of Him; for though there may be much instruction in the sciences of the world, yet Christ is the only teacher in the things of God." (10)

「彼ら（私の同僚である神の下僕）に対する私の欲求は、彼らが子供の国に来られるようになること、乳離れした子供、すなわち彼らがキリストの許に来て、キリストのことを学べるようになることである。世界の科学に関する多くの教授があるかもしれないが、それでもなおキリストは神に関することからの唯一の教師である。」

信頼できるものは神以外にないという確信は、グルレの信仰

を深めていった。宮野光男氏によれば「フレンド精神病院での生活は、有島の人間性を疎外するものを感じ、否定的に否定しはじめた時であると同時に、あえて人生を不可思議なる迷路として、なおも人間の生きる路を求めて止まぬ誠実な人間追究への志向の契機となったものである」と指摘している(11)。このような宮野氏の指摘を裏付けるように、有島は『ステイプン・グルレの生涯と福音の働きの想い出』からの右の引用に続けて、つぎのような感想を記している。

是等ハ凡テ余ノ心深ク味ヘル所ナリ。余ハ数日前来ノ余ノ日記ニカク記シ得タランコトヲ希ヘリシナリ。余ハ悪ヲナサンコトヲ懼レタリキ。而カモ此苦痛ハ今ノ余ガ善ヲナサザランコトヲ懼ルルノ苦痛ヨリハ痛ク軽シ。余ノ心ハ此事アルガ為メニ悲ム。善ヲナスハ余ノ好ム所、而シテ平安ノ来ル可キ唯一ノ道ナルヲ余ハ明ラカニ知ル。而シテ余ハソヲ行ハズ。余、余ガ心ヲ以テ矛盾ニ満チタリト云ヘルハ宜ナラズヤ。サレドモ唯一事、神ハ余ニ唯一事ヲ授ケ給ヒヌ。ソハ如何ナルコトアリトモ絶望セザラントノ信仰是レナリ。サナリ、永遠ヲ信セシメラレタルモノニハ絶望ハ忘ラル可キナリ。絶望ハ盡滅ヲ意味ス。永遠ハ實在ヲ意味ス。實在ノ前ニハ盡滅ハ全く無意義ナリ。此畏懼ス可キ永遠ノ前ニ余百度絶望スルトモノハ全く無益ナリ。ソハ百度絶望テフモノノ否定ヲナスニ過ギザレバナリ。

サレバ余ハ凡テノ障害ト凡テノ困難ト凡テノ試練トニ堪ヘザル可ラズ。好シ、余ハ永遠ノ表ニ立テリ。余ハ永遠ニ築カシコトヲ試ム可シ。来レ蹉跎、来レ毒杯。余ハ今ハ小ニシテ弱ク、脆クシテ暗ケレドモ、永遠ハ余ガ鞭撻ナリ。風ニ逐ハレテ起ル大濤小波、一粒ノ石塊ヲ思フガ儘ニ弄ビ得可シ。而カモ風止マバ波ハ無カラシ。風止ムトモ其所ニ一粒ノ石塊ハ残レリ。

グルレと同じように有島も悪行をなすことだけでなく善行をなさないことにも「懼レ」を抱き、自己の煮え切らない態度に苦痛を感じているが、「盡滅」を意味する「絶望」を抱くのではなく、「永遠の實在」を証する信仰を受け入れることによって「永遠の表」に立ち、「一粒ノ石塊」として自分の人生を生き抜こうという決意を示してみせる。「一粒ノ石塊」はたとえ小さくとも誠実な生き方は社会の風雪に耐え抜く力を持つ(12)。博士の縊死による動揺のなかで、「A」は一方では懐疑的な眼を向けながらもこの時点では依然として「永遠」を導く信仰の道に一縷の望みを託している。この小説を執筆した当時の有島の心境は、作品中の「A」とも、フレンド精神病院を辞職した頃の日記とも違うものとして考えておかなければならないが、宮野光男氏が「信仰離反以前のキリスト論が人間イエスを本質としたものであった」と指摘したように(13)、超越的な神に絶対的な信仰を寄せることが次第に困難になりながら、彼らに共通している

のは、神の子としてキリストが受難に耐え抜いたように、自己および社会に対して誠実に向き合おうとする意思であった。この意味において彼らの胸中にあつた一切の「躊躇」は作品では「後略」としてもはや描かれることはなく、「沈黙の礼拝」の静けさのなかで小説の幕が閉じたと考えられるのであつた。

註

本文中の引用に関して有島武郎は『有島武郎全集』（筑摩書房）からおこなつた。なお旧字体は新字体にあらため、ルビは適宜省略している。

- (1) 野上素一訳『新生』（『筑摩世界文学大系』第一巻、一九七三年一月、筑摩書房、三三七頁）
- (2) 野上素一「解説」（同右書、四一六頁）
- (3) 『神曲』の引用は同右書（一五〇頁）からおこなつた。
- (4) 江頭太助「有島武郎『迷路』論のためのノート（四）—フアン像の意味するもの—」（北九州大学文学部紀要」第二四号、一九七五年二月、二五頁）
- (5) 江頭太助は「イポリータとピアトリスとの関係はフアン像とベアトリーチェとの関係を反映させている」と推定し、有島がそれを「無垢な愛の象徴とする受容態度」が存していると指摘した（「有島武郎『迷路』論のこころみ（二）—リリー像の形象過程を中心に—」（北九州大学文学部紀要」第一六号、一九七七年一月、三六頁）。
- (6) 江頭太助「有島武郎『迷路』論のためのノート（三）—日記『観

想録』から序編「首途」への間で—」（北九州大学文学部紀要」第九号、一九七三年九月、三〇頁）

- (7) Charles L. Cherry "A QUIET HAVN", Associated University Press, Inc. 1989

- (8) 引用は Biholite 社によるアルソップ縮約版のリプリント版からおこなつた。同書二二頁。

- (9) 同右書、二三頁

- (10) 同右書、二三頁

- (11) 宮野光男『有島武郎の文学』（一九七四年六月、桜楓社、三七頁）

- (12) 江頭太助氏によれば、「首途」の結末で示された『成就か死か』には信仰離反の苦しみと厳しい自己検証の体験を経た重みがあり、その結果として挫折しそうな現在の生活をどのようにするか克服できるかという意味での未来が予見される」という（「有島武郎『迷路』論のこころみ（二）—未定稿「首途」の構想—」（北九州大学文学部紀要」第二二号、一九七四年八月、四二頁）。また坂田憲子氏は『首途』における有島の意図は、Aが自由論によつて（自分の内心の救ひ）に（熱中してゐる）（大正五年三月二十九日、日記）様を描き出すことであつたが、「自由論に戻つたはずのAは、宗教的視点にひきずられて（内心の救ひ）に成功しなかつた」と指摘している（近代文学考」第五号、一九七七年一月、六頁）。
- (13) 前掲（11）と同書（六六頁）

【おにし・やすみつ 本学教員】